



マクミラン版『ロミオとジュリエット』でのマクレイ  
Photo: Emma Kauldhar by kind permission of the Royal Opera House

## スティーヴン・マクレイ インタビュー

ロイヤル・バレエきってのダイナミックなプリンシパルに、デボラ・ワイスが近況をうかがいました。

デボラ・ワイス (以下DW) : 3月の『眠れる森の美女』では、世界各国に配信されるシネマ・ビューイングでも主演予定ですね。

スティーヴン・マクレイ (以下SM) : これは大きなチャンスだと前向きに捉えています。僕はプロのダンサーの仕事には高い価値があると信じ、それを愛しています。映画館でも上映するととなると、ロイヤル・オペラハウスだけでの上演とは比べものにならない数の人々に舞台を見てもらうことができますよね。何年か前のことですが、終演後の楽屋口に、5歳か6歳くらいの女の子が目キラキラさせて立っていました。僕はその子のプログラムにサインしながら話しかけました。「バレエは楽しかった?」「うん。」そして、どこが気に入ったか尋ねたら、少し考えてから、「全部」と。そのとき僕は、この日の自分の務めを果たしきった、出演者のひとりとして、この子に生まれて初めての感動を与えることができたと感じました。舞台

は、観客に感動を与えるチャンスなんです。地球上のあちこちで、人々が僕のステップ一つひとつを見つめているのも凄いことだけど、むしろ大切なのはそちらの方ですね。

DW : ロイヤル・バレエでは昨シーズンから芸術監督が交代しましたが、新体制になってあなた自身に何か変化はありましたか?

SM : 自分に正直に生き、なすべきことをするというところだけを心掛けています。ひたすら踊ることを愛し、舞台に立ち続けることが、最優先です。人間は往々にして環境の変化に影響されがちですが、日々変わらずバーに手を載せてレッスンを怠らず、努力を続けていきさえすれば、状況は必ず良い方にめぐるもの。キャリアというのは3本脚のスツールと同じで、才能と努力と運のどれか1本が欠けてもだめ。全部が補完しあってこそ安定していただけるんです。

DW : オーストラリアのご出身ですね。オーストラリア・バレエで踊ろうと思ったことは?

SM : 僕はもともと芸術一家の出身でなかったのですが、正直、何も知らずにバレエの世界に入りました。オーストラリアで習った最後の先生がロイヤル・バレエ学校の出身だったので、ロイヤルについていろいろ聞かされ、アンソニー・ダウエルや様々な名舞台のビデオを見せてもらえました。そして、いつも「トップを目指しなさい」と言われてきました。先生にとって最高のバレエ団だったロイヤルは、今の僕から見ても世界最高峰のカンパニーのひとつです。

DW : 他のバレエ団に移籍を考えたことは?

SM : 正直、自分でもよく分からないです…ロイヤルに所属しながら世界中に客演し、いつもと違う人々と仕事をして多くのことを学べたのは、ダンサーとして最高の糧になりました。ナショナル・バレエ・オヴ・カナダ、オーストラリア・バレエ、東京バレエ団、そしてボリショイ。7月にはクイーンズランド・バレエでのマクミラン版『ロミオとジュリエット』のカンパニー初演に客演します。カルロス・アコスタとタマラ・ロホも一緒です。こういう経験を積めるのは、本当に幸運だと思います。カナダで踊ったときは、芸術監督のカレン・ケインが素晴らしく、いろいろと中身の濃い話ができました。

DW : ダンサーとして、またプライベートで興味のあることは?

SM : いろいろありますが、まずモータースポーツが大好きですね。父がドラッグ・レーサーだったので、僕は車と一緒に育ったんです。スピードや、それを可能にする技術は最先端の科学に等しく、その全てに惹かれます。ただ直線を最高速度で走るだけでなく、陰でそれを支えるスタッフの仕事は、芸術と呼ぶにふさわしいものです。

DW : ツイッターを積極的に使っていますよね。

SM : 主にスケジュールをアップしています。以前から手紙やフェイスブックでよく聞かれていたのですが、ツイッターなら返事が早いと思って。仕事上のツールなので一日中張り付いてるわけではないけど、主張のはっきりした人や以前にはすれ違うこともなかったような人々と接点ができるのは楽しいですね。フェイスブックも使っていますが、載せる情報は意識的に違うものになっています。(訳: 長野由紀)